

『ファウスト』第Ⅱ部における「母たち」(Mütter)について

根岸 淳子

よく知られている場面であるが、『ファウスト』第Ⅱ部第1幕で皇帝から古代ギリシアのパリスとヘレナを見たいとせがまれたファウストは、メフィストーフェレスを「暗い回廊」に呼び出して、その方法を教えるようにと迫る。彼らの姿を手に入れるためには「母たち」(Mütter)という名の冥界の女神のもとへ行かなければならないと聞かされたファウストは、突如、恐怖に襲われる。「母」という表象はなんらかのものを産み出す存在であり、また「母」の形象は優しく慈悲にあふれるものであるのが一般的通念だとするなら、ゲーテの「母たち」は、それを聞いたファウストに畏怖の念を抱かせる点で、この通念とは異なりかなり異様である。この「母たち」が登場する比較的短い場面は、1830年1月という、『ファウスト』全体の中でも最後の時期に完成されたもののひとつである。当初、ヘレナ像を請い受けに行く相手として考えられていたのは、ギリシア神話に登場する冥界の女神ペルセポネーであった。しかしその場面は描かれず、代わりに登場したのが「母たち」だった。Mütter という語でゲーテが表そうとしたものは何かということについてひとつの答えを出すためには、その恐ろしさ、およびその形象が複数で表されていることを起点に、古代ギリシアの女神たち、特にデーメーテルとペルセポネーとの比較を行い、また「母たち」を取り巻く時間についての考察をする作業である。この作業を介して明らかになるのは、「母たち」の異様な表象が、その出現の時空形式そのものだけということであった。

ゲーテがペルセポネーを描かなかったのは、この女神がギリシア語では「その名を口にすべからざる少女(アレトス・クーラ)」と呼ばれた、畏怖を呼び起こす大いなる存在であったからである。それゆえ秘儀宗教的な「母たちの場面」におけるゲーテは、秘儀に通じた者としてその「秘匿義務を守った」といえるかもしれない。しかし、「描くことができない」というのが「母たち」という女神の本質である。つまり、それは理性や経験では捉えられないもの、結局は「名状しがたいもの」といわざるをえないのだが、それにもかかわらず「母たち」はそれを通して大いなる存在を予感させるためにゲーテが取ったぎりぎり可能な表現形態であったともいえる。名指しえないもの、名状しがたいものを名指そうとする一見不可能にしか思われぬ努力の表現が、この「母たち」の形象なのである。